

「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017」が開催

11月25日から28日の4日間、国際センターなどを会場に「世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017」が開催されました。これは、スイスで隔年開催される「防災ダボス会議」と連携した国際会議で、仙台で初めて開催されたものです。さまざまなセッションやブース展示などが行われ、200人を超える海外からの参加者をはじめ、約1万1000人の来場者でにぎわいました。



▲世界防災フォーラムオープニングの様子

26日に行われた市主催のセッションでは「仙台発『より良い復興』」『Build Back Better』仙台モデルの提示をテーマに本市の取り組みを発信しました。また、企業等による新たな技術・製品の展示を行う「2017防災産業展in仙台」と、子どもも大人も一緒に防災を学べるイベント「防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）2017」も同時開催。「ぼうさいこくたい」では、防災・減災に取り組む学生や市民団体が日頃の活動の成果を発信したほか、ミニステージや体験型イベントなど、気軽に防災について学べるプログラムもあり、笑顔で楽しむ家族連れの姿も見られました。



▲「ぼうさいこくたい」のミニステージで行われた「ぼうさいダンス」

「協働がつなぐ仙台」郡市長とふれあいトークを開催

市長が地域でさまざまな活動をしている市民や団体を直接訪ね、生の声を聴いて市政の運営に活用させていただくため、「協働がつなぐ仙台」郡市長とふれあいトークを開催しました。

初回となる11月30日には、泉区高森東地域で活動している「結いの会・高森東」の活動拠点を訪問しました。「結いの会・高森東」では、毎週商業施設内に交流の場「結いカフェ」を設け、高齢者同士が助け合う仕組みを通して安心で住みよいまちづくりに取り組んでいます。郡市長は会の皆さんと、



▲交流の場「結いカフェ」参加の皆さんとお話しました



▶「結いの会・高森東」の皆さん

地域の誰もが利用できる場を提供する「居場所づくり」や、ごみ出しや病院付き添いなどの日常のちよっとしたことを行う「お互いさまの助け合い」、一人暮らしの高齢者等の安否確認を行う「見守り」などの活動について懇談しました。高森東地域は市内でも高齢化率が高い地域ですが、笑顔で交流されている皆さんから、自分たちのことは自分たちで解決しようという力強さが伝わってきました。今後、市長がいろいろな活動をされている団体等を継続的に訪ね、お話を伺います。

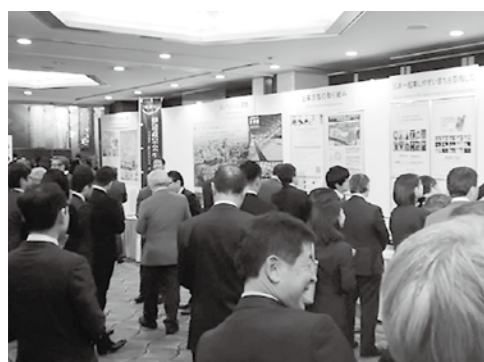
音楽ホール検討懇話会を開催しました

「楽都仙台」の魅力さらさらに高める拠点施設として、(仮称)仙台市音楽ホールを整備するため、有識者による仙台市音楽ホール検討懇話会を設置しました。11月27日に開催した初会合では、委員の方々から、文化施策やまちづくりの視点など音楽ホールの考え方について、さまざまな意見をいただきました。

この懇話会では、平成30年度末までを目途に、仙台にふさわしい音楽ホールについて、検討を進めていく予定です。

「2017仙台の夕べ」を開催

首都圏からの投資や交流人口の拡大を目的とした市のシティセールス活動の一環として、11月24日、「2017仙台の夕べ」を東京都内のホテルで開催しました。この催しは仙台商工会議所と共催で毎年行われており、今年も首都圏の企業・団体等の代表者や関係者など、約700人の方々にご参加いただき盛況な会となりました。開催に当たって、郡市長は震災時の支援への感謝を述べるとともに、「本市の経済活性化と交流人口の拡大にスピード感を持って取り組むことが重要と考えています。そのためにも首都圏の皆さまには、引き続きご支援とご協力をお願い



▲パネルで市の施策などをPRしました

仙台版図柄入りナンバープレート案が決定

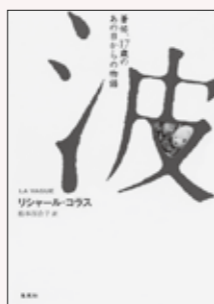
「仙台版図柄入りナンバープレート」の図柄案が、デザイン投票により「豪華絢爛！仙台七夕まつり」に決定しました。投票は10月31日から11月22日に、市ホームページや博物館などで3つの案からの選択制で実施。決定した案は、最多の3086票を獲得したものです。仙台藩祖・伊達政宗公の時代より仙台に息づく「伊達な文化」の豪華絢爛な一面を、仙台七夕の吹き流しにより表現。また、政宗公の騎馬像や、伊達家で最も格の高い家紋「三引両紋」を配置しています。

今回決定した図柄案は11月29日に国土交通省に提出され、視認性検査等の後、今年10月頃から交付が開始される予定です。



3.11 震災文庫を4

「波」蒼佑、17歳のあの日からの物語



リシャル・コラス / 著 集英社 刊



中村美亜 / 著 「文化政策研究」第10号 2016 日本文化政策学会 刊 所収

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本を2冊紹介します。

たじろがない眼差し、そして音楽の力 (公財) 音楽の力による復興センター・東北 代表理事 大澤 隆夫

「波」は親族を亡くした高校生と、東京育ちの年若い叔父を主人公に、沿岸部での出来事を瓦礫の町と化した気仙沼に集約し、紡がれた小説です。

著者は長く日本に滞在するフランス人実業家。「わずかな寄付をするだけではどうにも気持ちがおさまらなかった」と執筆の動機を語っています。

瓦礫や喪失の中、再生への道筋の一カ月を惨状から目を逸らすことなく、空気の感触さえも綿密に描き出しています。伝承が強く意図されており、著者は語り部でもあるわけですが、その力強くあたたかい眼差しは、水保におけるカメラマンのユージン・スミスとも重なるように思えます。

九州大学の中村先生のこの論文は文化政策研究第10号に収められています。

先生は芸術文化と社会の新しい在り方を研究されており、震災という危機的状況において音楽が持つ力がどのように引き出されていったか、当センターの活動も事例に加えて検証されています。

音楽に魔法の力があるのではない、その力を引き出す工夫こそが重要との指摘には、これまでにない力強い説得力を感じます。私たちの活動の総括や、数多くのコンサートから蓄積した知見を将来の大災害に役立てるためのキーワードとして、大きな意味を持つてくるように思います。

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます。問市民図書館 ☎261・15885